



10  
月

野分のわか

5

黒葡萄くろぶどう

15

十三夜

27

虫集すだく

43

11  
月

散り紅葉ちりもみぢ

57

木枯らしこがらし

73

コタツ

87

12  
月

事八日ことようか

103

狐火きつねび

115

大つごもり

127

強い風を伴った台風が、

午後から夜半にかけて通過するらしい。

空は重たそうな灰色の雲で覆われた。

強い風が渦巻くように校庭の木々を揺らしている。

まだ雨は降り出していない。

誰かが外の様子を見ようと窓を開けた。

ジメジメした風が、どっと吹き込んで、

教室中に土と水の匂いが広がった。

「台風が接近しているので、今日はこれで終了。

寄り道しないで早く帰るように」

教室がざわめく。

「先生、台風そんな凄いの?」

誰かが聞いた。

「暴風警報が出る。昔の言葉で言うと『野分』だな」

クラス担任は国語の先生だった。

時々古めかしい言葉を使う。

『野分のまたの日こそ』

先生は黒板にこう書いた。

「これは古文の宿題。意味を調べてくるように。

それと小テストを返すから」



みんなが一斉に帰ることになったので、昇降口は混雑していた。  
「テストはどうだった？」

友人のYがボクに聞いた。

「もう全然ダメだったよ。」

苦手な宿題も出だし、憂うつだよ」

するとYはボクに一枚のメモ用紙を差し出した。

「あれは枕草子だよ」

そこには、こんな一節が書かれていた。

『野分のまたの日こそ、いみじうあはれにをかしけれ』

Yと別れた後、ボクはさっき貰った用紙を取り出した。

